

NATURE

ネイチャー

5 ピグミーファルコン



雄親が幼鳥に与えるトカゲを捕らえて運んで来た



雌親(左)と幼鳥2羽が同じ枯木にやって来た。1羽の幼鳥(中央)は脚にトカゲを持っている。雄親から受け取った獲物だ。幼鳥は、まだ自力では獲物を捕ることができない

すどう・かずなり 1961年、京都府夜久野町(現福知山市)生まれ。イヌワシに魅せられ、滋賀を拠点に日本やアフリカで野生動物の撮影に取り組む。米原市在住。写真集「Golden Eagle イヌワシ」(平凡社)、DVD「ブラックイーグル」(ツキノワグマ)など。



大木に造られたソーシャブルウィーバーの巣。百以上ある巣のうちの一つをピグミーが使っている



動物写真家 須藤一成

獲物発見、小さくとも矢のごとく

アフリカで最も小さい猛禽であるピグミーファルコンは、体長が20センチほどのハヤブサだ。ちょうど日本のモズくらい大きさである。小さくても精悍な顔や、体に比較して太い脚や爪など、猛禽としての力強さを備えている。主に昆虫や小型の爬虫類、時にはネズミや小鳥などを捕食する。

脱帽だ。この小さなハヤブサはアフリカ大陸の東部と南西部の二つのエリアに分かれて分布している。これは彼らの営巣習性に関係している。多くのハヤブサ類と同じように彼らもまた自分では巣を作らず、ウィーバー(ハタオリドリ)類の巣を利用する。東部ではホワイトヘッド・バッファローウィーバー、南西部ではソーシャブルウィーバーの巣だ。これら2種のウィーバーの分布エリアにだけピグミーは暮らしている。

何百ものウィーバーの巣が集まって、大きなものでは重さ1トにもなる。この巨大な集合住宅の内部は、暑い夏には外気温より低く、寒い冬には暖かいという過こしやしやすい環境を作り出している。ピグミーは、その一室で子育てをする恩恵を受けているのだが、ウィーバーにしても、ピグミーがいることで何らかの利益があるのだと思う。

うちに、共生関係の理由が分かる行動を目撃する日が来るかもしれない。その瞬間を映像に納められたら最高だ。ピグミーのことを調べようと、インターネットで検索して驚いたことがある。ヒットするのは、この小さなハヤブサの販売や飼育個体の情報ばかりだ。アフリカの限られた場所だけに生息し、なかなか出会えなかったこの猛禽が、日本で簡単に手に入られることを不安に思った。日本や他の国々へ輸出するための捕獲で、生息地から姿を消してしまつてくれないことを祈りたい。

小さいながらも威厳を持ったピグミーは、アフリカの大地で獲物を追って生き生きと暮らしている。高みに止まって獲物を探し、猛スピードで急降下して行く颯爽とした小さな姿が、消えることなく続いてほしいと願う。